

学校教育目標	教育課題	自己評価・総合評価 校長先生が別紙で評価します	学校関係者評価・まとめ 学校運営協議会長が別紙でまとめます	
心と体を ひらいて学ぶ 美麻の子	協働の学びの質を高める		学校関係者評価の結果及び意見	
	重点1 学びづくり 魅力的な学習問題を据え、充実した振り返りを繰り返すことで、自分たちの学びに自信をもつことができる授業づくりを目指します。	・子どものつぶやきなどの声を取り上げて学習問題を据えられたことや、児童生徒の考えを教師がつけられたことが学習への主体性を高め、対話して学ぼうとする姿につながった。一方で、対話を苦手にしている子たちにどんな支援が効果的なのか工夫が求められる。 ・ICT 活用は、教師間でも学習効果が研修などを通じて共有されながらも、活用場面や活用方法には課題が残った。	B	・異学年合同の授業を取り入れたり、地域の方に協力を求めたり、協働の学びの実践が積極的に行われている。また、複数担任制を取り入れて職員間で児童生徒の情報を共有しやすくするなど創意工夫がされている。 ・対話を苦手とする子への対策や ICT を活用した授業について、よりよい方法を模索していったほしい。
	重点2 体づくり 元気アップ運動を継続し、持続可能な体力向上と健康生活の習慣化を目指します。	・どの期も 80%以上が肯定的に評価しており、子どもたちの回答にも、体力がついた、ストレッチを続けているなどの意見が見られる。ホップ期は、純粋に体を動かすことが好きで、なかよし班での運動も楽しんでいる。ジャンプ期は運動をすることの重要性を理解しており、筋力や体力向上を目的に取り組んでいる。 ・見学の多い子どもや、運動自体に一生懸命になれない子どもに対して、まずは「やってみる」と思えるような活動の工夫が必要である。 ・朝の15分間の活動は習慣化されているが、マンネリ化しないように多様な動きを取り入れ、「やってみる」入口づくりにつながった。	A	・ゲーム性のある活動を取り入れるなど、すべての児童生徒が運動の楽しさを味わえるような工夫がしっかり検討され、実施されている。 ・家庭での生活習慣が体力や健康に与える影響は大きい。必要に応じて保護者全体や、個別に啓発を行ってほしい。
重点3 集団づくり 自治活動や歌声づくり、ブロックでの活動を基盤として、少人数の多様なグループを体験することで深く信頼し合う人間関係の構築を目指します。	・自治会では、上級生が自分たちで学校づくりをしようという思いがよく表れ、課題を生徒同士やグループ内で話し合っ解決しようとする姿が見られた。 ・歌声づくりでは、なかよし班で歌うなどの工夫により異学年との関わりが増え、互恵的な関係が育まれた。ただ、学年によって温度差があるので、どの年齢でも楽しく歌えるように工夫したい。 ・全校でみると 85%の子どもたちが楽しく安心できる場になっていると回答している中で、否定的な回答がステップ期で増加している。メンドシーノ訪問が延期となり、ステップ期の活躍の場が減ったことも影響があると考えられる。	B	・歌声づくりや自治会の活動が上級生の意識の高さにより、主体的によくできている。上級生に声をかけてもらえることが、下級生にとっても活動に加わる励みになっている。 ・配慮を要する児童生徒を含め、全ての子がグループに参加できるように個々の特性に合わせて柔軟に対応する体制を、さらに進めてほしい。	

領域	対象	評価項目	評価の観点	一学期の振り返り	評価	改善策・向上策	二学期の振り返り	評価
教育 活動	学びづくり	主体的に学ぶ授業	「3つの学び方」が大切にされ、児童生徒が主体的に学び、達成感もてる授業が行われている。	・「わからない」と言えるが、その後の追究につながらないことがある。「わからない」の中身や思いを明確にしていく必要があるのではないか。	B	・何がわからないのかを言えるように、友だちの何がわからないのかを聞けるようになるように教師のつなぎを大事にする。 ・自分の考えと相手の考えを比較し、同じ所や違う所を見つけ、教師がつなぎ、問いを生んでいく。	・学年があがるにつれて、3つの学び方を意識し授業に取り組んでいる。授業アンケートからも「分からないことを分からないと言える」「友達の話の聴くことができる」が80%を越えていることからうかがえる。	A
			「魅力ある学習問題」から生まれた、自分のわからなさ(問い)を解決しようという目的をもって授業に向かうことができている。	・学習問題を設定しようとしているが、毎時間考えることは難しい。どうやって子どもの問いを入れて作ればよいのか。教材研究の時間が足りない。	B	・知識や経験が無ければ、比較する対象がないので問いが生まれにくい。1時間毎の学習問題だけでなく、単元を貫く学習問題も大事にしながら知識獲得の時間や体験する時間を生み出していく。	B	
		考える力が高まる 授業	個の学びが尊重され、対話を通して新たな見方・考え方に合う授業が行われている。 学習問題の解決のために ICT 機器や思考ツールなどを有効的に使って考えることができている。	・子どもたちは対話の良さを知っているし、感じている。対話の必要性が生まれる問題を提示することが大切である。 ・研修を通して活用が促進されている。子どもにとっては、よい支援のツールとなっている。使い方については指導が必要な面もある。思考ツールは、中学生になるとよく書けている。	B	・子どもたちが見合い、学び方を学ぶ機会を設ける。 ・ICT については、引き続き教師が研修を進め、必要な場面で活用ができるようにしていく。 ・授業内容によって机の配置を工夫し、対話を促していく。 ・総合では人とのかかわりを多くし、コミュニケーションスキルをのばすと共に、その人となり学ぶ機会としたい。	B	・子どもたちは対話のよさを実感しながら学んでおり、学習問題を自分たちで解決しようという気持ちが強い。市民科や生活・総合の活動は、多くの方と関わりを深めながら、課題に対し対話をしながら解決していく姿が見られる。 ・ICT や思考ツールを活用することで、児童生徒はより深く追究できると感じている。 ・進学年による学習の場を設けることで、相手意識や目的意識が高まり、見方・考え方が広がった。 ・特別な支援が必要な子どもが増えており、個の学びを尊重するにあたり、対応ができていくようになってきた。
	振り返りが充実する 授業	「今日のゴール」「単元の核心」等をもとに、1時間や単元の終わりに、自分が大切だと感じたことを振り返ることができている。	・学年があがるにつれて、自分なりのマインドマップやOPPの表し方ができるようになってきている。授業を振り返るために、何を書かせるのかを考えていく必要がある。	B	・学習問題に対する答えだけではなく、今日のゴールについてどんなことがわかったのか、自分の考えが変わった意見は何かなど、書く時の視点を明確にして書かせたい。	B	・単元の問いに対してや毎時間のゴールに対しての振り返りを工夫することで、何のためにやるか意識が高まってきているのではないかと。ホップ期でも、OPPシートやマインドマップなど、単元を通して振り返る取り組みができた。	A
	体づくり	健康づくりや体力づくりを意識した生活習慣	職員は、児童生徒が健康に気をつけて体力づくりを意識した生活ができるように努力している。	・「すこやかカード」から、基本的な生活習慣を振り返った。特に朝の排便が定着していない児童生徒が全校で8割程度見られた。 ・支援学級の児童は、体育の授業に十分参加できないことが多いので、外遊びや体育館で体を動かす時間を取るようになった。	B	・生活習慣(SNS 利用)の見直しは、学校からの意識付けだけでは改善できないので、家庭と連携し、健康づくりに向けて情報発信をしていく。改めて運動する機会を作るのではなく、生活の中で気軽に親子で取り組めるストレッチを広めていく。 ・元気アップ運動では、自分から積極的に体を動かそうとしている。見学が多い児童に対しては、できることから始め、何故苦手としているのかを把握し、体のどの部分を使い、どう動かせばいいの具体的に伝え、苦手意識をなくさせる。	・ほけんだよりや、発育測定時の保健指導などを通じて生活習慣についての意識づくりをした結果、体調不良を訴えて保健室に来室する児童生徒が少なくなった。 ・コロナウイルス対策として手指消毒や換気等を継続的に行ってきたことで、冬季に入っても発熱による欠席者は例年より少ない。5年生以上の希望者による血液検査の結果でも、他校の児童生徒より数値が良く、健康づくりに意識した生活が送れている。	A
		元気アップ運動へ積極的に取り組む子ども	学校の元気アップ運動を通して、体づくりや健康づくりを意識できるように工夫している。	・マンネリ化しないように、裏山のマラソンコースを走ったり、坂道しほ取りダッシュ、サーキット等多様な動きを取り入れた。授業に向かう気持ちの切り替えの為、朝の15分間を大切にできた。しかし、苦手・面倒等の理由で見学する児童が固定化されてきた。	A	・元気アップ運動では、まだ見学をする児童が見られるが、先生方が声を掛け、一緒になって運動をすることで、子ども達の意識も変わりつつあると思われる。また、ダンス体操をとり入れたりと、鬼ごっこをやったりと、マンネリ化しないような内容にすることで、「やってみる」入口を増やす工夫をした。	A	
集団づくり	コミュニケーションを高め、信頼し合える人間関係づくり	学級づくりや学校自治会活動、歌声づくりを通して信頼し合える人間関係が築かれている。	・生徒からの持ち込み企画や歌声発表などがあり、なかよし班や自治会でのリーダー体験を通して成長している。上級生の姿が目指す姿として下級生に示されている。また、集団に入ることが苦手な児童生徒も、小さい子たちとの触れ合いから、徐々にかかわりを持ち始めている。	A	・「対話」「共有」をベースにした人間関係づくりを今後も進めていく。より活発にするために、「見える化」(見返す場)することが有効。「他学年の授業を見よう場」をつくることを提案したい。 ・グループによっては対話の仕方に「差」があり、教師の援助が必要であった。対話を促すような「問い」や「テーマ」が重要。対話の力を、教科横断的につけるよう意識していきたい。 ・児童生徒の変化を見逃さないように、教師同士が共有しあうことが大切。定期的な意見交換の場はこれからも大切にする。 ・しっかり指導すべきはする。「こうした方がよいね。」と子どもたちに納得させるような指導をしていく必要がある。	・文化祭や歌声づくり、自治会企画などで、全校の生徒がお互いの姿を見合ったり、主体的に対話で関わり合ったりしながら、関係づくりを進めることができている。上級生が下級生を思いやる姿が随所で見られ、下級生にとって目指す姿を示せていた。他学年の授業を見よう場はもていないが、生徒から要望が出ているので今後実現させていきたい。学年を越えて行う創発的な授業を進めることができた。	B	
	命の重さを知り、権利を守る	学校は一人ひとりを大切に、いじめや差別のない、楽しく安心できる場所になっている。	・『そろえなくてよい』『ルールで縛らない』という原則で接することで、個性が尊重され人権を大切に作る雰囲気醸成されており、『人権アンケート』では、いじめの該当はなかった。 ・「フレットはいけないもの」はしっかりそろえるという点で、やや教師間で徹底できない点も見られた。	B	・全校児童生徒へのアンケートでは、いじめの該当はなかった。しかし、友だち同士のトラブルは多少あり、その都度、保護者とも連絡を取り合ったり、子どもの胸に落ちるように時間をかけて指導にあたったり丁寧に対応するよう心掛けて解決してきた。また、職員会議などの折に、気になる児童生徒の様子について、細かく話題にして、全職員共通認識のもと、支援することができた。	A		